

上級におけるレジュメを用いた発表活動の授業の試み

発表者：黒崎 亜美・牧原 紀子（ラボ日本語教育研修所）

1. はじめに

アカデミック・ジャパニーズ教育の目標の一つとして、ゼミ・講義内での発表、およびそれに付随するレジュメの作成に対応できる能力を身につけるということがあげられる。しかしレジュメ作成をとり上げた授業についてはいまだ報告が少なく、十分に研究されているとはいえない。

本稿では、中上級の学習者を対象に、「読む」「聞く」「書く」「話す」の四技能をのばすことを目的とした授業実践について当教育研究大会において報告した「上級におけるマンガを用いた産出能力を伸ばす授業の試み」（黒崎 2008）を、さらにアカデミック・ジャパニーズに対応するために、1)より専門書に近い新書を使用する、2)発表の際にレジュメを作成するという二点の改変を加え、実施した授業について報告したい。

2. 実践の背景

2.1 レジュメと発表

レジュメを手元においての口頭発表は、大学・大学院でのゼミ、講義内での発表では必要不可欠な技能である。また、これらの言語行動は、ビジネスの場面において、会議での進行、研修会参加報告などの場面で、求められる可能性があるものである。レジュメは、ノートテイキングの技能と重なる部分は多いものの、他者に伝達する側面が大きく、また、「話す」という行為と一つになってはじめて完成するものであるという認識を要する。

茂住（2006）でレジュメ指導の重要性が述べられており、田中（2008）でも、学習者がレジュメの指導の必要性を感じていると報告されているが、発表および作成したレジュメが、伝達の有効な手段となっているのかということを評価し、また、学習者自身が確かめるといふ授業例は、多く見られない。発表に関しても、発表活動の評価についてはアンケートで行なう（古賀・中島 2005）、質疑応答による評価（菅原・高橋 2008）があるが、評価者によってのばらつきが問題として残る。

2.2 上級学習者

日本語教育学会編『日本語教育事典』（大修館書店）では、上級学習者に求められる力として以下の定義をしている。

高度の文型・文法、漢字（2000 字程度）を習得する段階。社会生活上必要な口頭能力と読み書き能力を獲得し、仕事や専門の勉強といった目的を日本語で達成できるようになることが目指される。学習時間 900 時間程度。（pp. 759）

この定義内の「仕事や専門の勉強といった目的を日本語で達成できる」ためには何が必要なのか。実際の言語行動を考えると、四技能それぞれの独立した能力だけでは足りない。それらをいかに統合し、他者と情報のやりとりを行うかということに注目する必要がある。

3. 実践報告

3.1. クラスの概要

授業は、平均学習時間 1600 時間程度という学習者（インド人 1 名、韓国人 4 名、中国人 1 名）のクラスで行なった。全員が大学進学を目標としており、大学の講義やゼミなどで必要となるレジュメ作成から発表までの基礎については、本授業の前段階として学んでいる。しかし、問題点としては、①文章、口頭ともに他者に分かりやすく伝達する事ができない、②聞いた話の内容は理解できるが、重要なポイントを絞り込む事ができない、③＜聞き手＞が、＜話し手＞の強調したい部分に気づけない、といった点があげられた。

3.2. 授業の概要

授業は、2012 年 4 月から 6 月までの計 10 回（1 回 90 分）で、「読解→レジュメ→説明」という授業で行なった。上記の問題点、つまり情報を的確に伝達し、受容できないという点を解決するための授業を行う必要があり、四技能を統合的に行う活動を盛り込む計画をたてた。授業の目的は、以下のようになる。

【読む】 自分のペースで、新書を読み、理解することができる。

【話す】 理解した内容をわかりやすく説明できる。

他の人の話のわからない部分について、適切に質問できる。

【聞く】 他の人が話している内容が理解できる。

【書く】 説明に必要なレジュメが書ける（レジュメ）。

聞いた内容をキーワードでまとめて書ける（ノート）。

3.3. 授業の手順

手順は、以下のようになる。

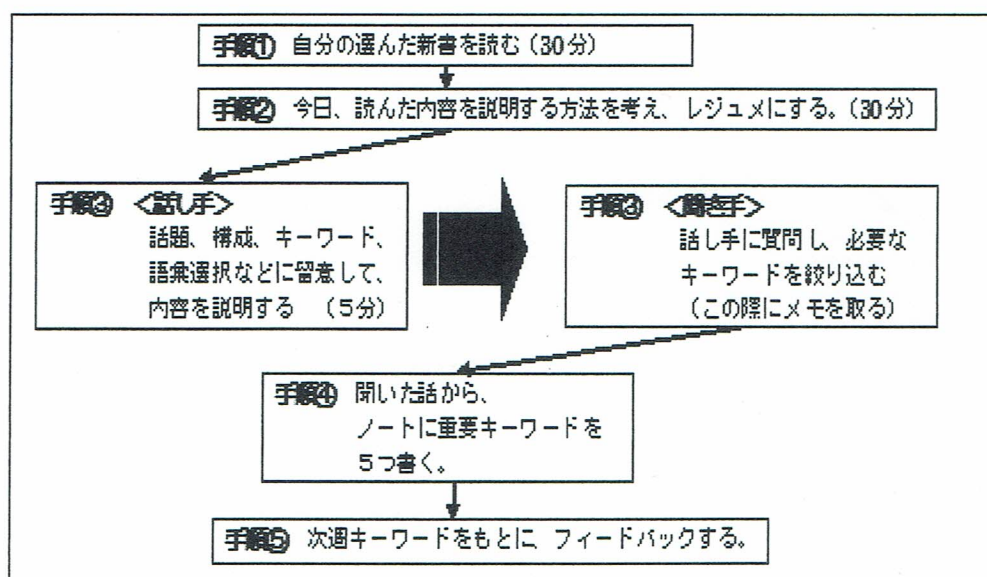


図 1 「読解→レジュメ→説明」授業の流れ

実際の授業が開始される前に学習者はそれぞれ 3 ヶ月間を通して読む新書を選ぶ。その上で、

手順① 授業内で 30 分、それぞれ黙読する。

手順② 黙読後、内容を他の学習者に説明できるように、レジュメとしてまとめる。

手順③ <話し手>である学習者は、作成したレジュメを配布し、<聞き手>であるクラスの他の学習者に読んだ内容を説明する。また、<聞き手>である残りの学習者は、<話し手>の話聞き、終了後、分からなかった部分などに関して質問をする。

手順④ <聞き手>である学習者は、③で聞いた内容のメモをレジュメに書き込む。そして、内容に大きく関わるような重要だと思われるキーワードをノートに5つ書く。

手順⑤ 次週、<聞き手>が重要だと思いピックアップしたキーワードをもとに、自らの発表内容や発表方法、レジュメなどを振り返る。

3.4 授業の具体的な進め方

学習者は、事前に教師が作成した「読解→レジュメ→説明 新書リスト」の中から、3ヶ月間、自分が読み進める書籍を選ぶ。教師はリスト作成の際には、ジャンルが偏らないよう心理、科学、生物、文化など様々な分野の新書を選ぶようにした。

手順① 基本的には、学習者が自力で読みすすめる。ただし、教師への質問や、辞書の使用は禁止しない。あくまでも自然な形で読み進める。これは、読み進めるためのストラテジーを学習者が自ら構築する必要があるためである。テキストを読む時間はおよそ30分程度である。

手順② 黙読後、学習者にはその日読んだ内容を、他の学習者に伝えることを念頭に、どのようにまとめるかを考える。内容をどのように構成するか、どのように伝えるか、どのように情報を提示するかを学習者自身で考えながら、レジュメの形にする。レジュメ作成時間はおよそ30分程度である。

手順③ <話し手>である学習者は、作成したレジュメを聞き手である他の学習者に渡し、読解で得た情報を説明する。この時<話し手>となる学習者は、読んだ内容を整理し、伝えるだけが目的ではない。読んだ内容を簡潔に、かつ要点を絞ってわかりやすく説明するため、自らの既習語句の中から使用すべき適切な語句を検索する必要が高まる。その一方で、<聞き手>が理解しやすく、かつメモにとりやすいように説明をすることも求められる。そこで、視覚的補助情報としてレジュメを用いて、読解で得た情報をどのように提示するかを考える。この過程で、学習者は、<聞き手>にわかりやすく伝達する内容構成、情報提示方法、話し方などに配慮する事になる。また<聞き手>は、わかりにくい箇所を質問し、<話し手>の話す内容の要点と主要箇所の両方をまとめる必要がある。

手順④ <聞き手>である学習者は、質問をしながら<話し手>の話す内容をまとめ、重要

表1 「読解→レジュメ→説明」の授業で扱った作品

新書リスト
栗原堅三『味と香りの話』(岩波新書)
村山斉『宇宙は可でできているのかー素粒子物理学で解く宇宙の謎』(冬舎新書)
鮑戸弘『売れ筋の法則ーライフスタイル戦略の再構築』(ちくま新書)
石山昱夫『科学鑑定ーひき逃げ車種からDNAまで』(文春新書)
栗原康『共生の生態学』(岩波新書)
山田真哉『さおと屋はなぜ潰れたのかー身近な疑問をはじめる会計学』(光文社新書)
21世紀研究会編『常識の世界地図』(文春新書)
本川達雄『ゾウの時間ネズミの時間ーサイズの生物学』(中公新書)
丸橋賢『退化する若者たちー歯が予言する日本人の崩壊』(PHP新書)
有馬哲夫『ディズニーランドの秘密』(新潮新書)
湯浅健二『日本人はなぜシュートを打たないのか?』(アスキー新書)
宮永美知代『美女の骨格ー名画に隠された秘密』(青春新書)
広瀬弘忠『人はなぜ逃げおくれるのかー災害の心理学』(集英社新書)
斉藤宣彦『マンガの遺伝子』(講談社現代新書)
石黒浩『ロボットとは何かー人の心を映す鏡』(講談社現代新書)

語5つをノートに記述する。これらの語は、＜話し手＞の話の中やレジュメ内に登場した語、またはその類語、話の内容をまとめた語などを書く。この段階で＜聞き手＞は、＜話し手＞が強調した部分、提供された内容で重要箇所を読み取ることが求められる。

手順⑤授業後、全員が提出したキーワードを、①全体でいくつのキーワードが出されたのか（異なり語数の数）、②それぞれのキーワードが何人が出したかなどを整理し、次回にフィードバックする。

表2 ＜聞き手＞が拾い出したキーワード例
(作品例「常識の世界地図」)

表2は、一人の＜話し手＞に対して、＜聞き手＞全員が拾い出したキーワードの例である。＜話し手＞の話が＜聞き手＞全員にわかりやすくなれば、異なり語数と、一人の＜聞き手＞だけが出しているキーワードが少なくなる。またこれらの数から、すべての＜聞き手＞に誤解されることなく話せたことを＜話し手＞自身が確認できる。

人数	キーワード（異なり語 8語）
7	ベール／写真／一夫多妻制・一夫多妻
4	鞭打ち／結婚
3	イスラームの女性
2	不貞行為・「鞭打ちと結婚」
1	マレーシア

4. まとめ・今後の課題

学習者からは、「読解であいまいだった箇所は説明が不十分になり、＜聞き手＞からの質問が集中した」という反省などがあった。また、レジュメ作成や説明で「できるだけ語彙を簡潔にし、見易さを配慮した」「重要な部分については、言い換えたり繰り返したり何度か意識的に語彙をあげてみた」といった伝達のための工夫が見られる。さらに、キーワードを用いてのフィードバックの際には、「みんながあげたキーワードを見て初めて、自分の説明が正しく伝わっていないことがわかった」などの振り返りも見受けられた。

今後、この活動が学習者の読解能力、聴解能力、発話能力などにどのような影響を与えるのかという継続的調査が必要になる。また、現段階ではデータが足りない状態だが、この活動を継続し、＜話し手＞の言語能力と＜聞き手＞の言語能力が、それぞれ、拾い出すキーワードの数の変化にどのように関わるのか、またそれが読解の難易度によって違うものかなどの調査も必要と考えている。

【参考文献】

- 古賀美千留・中島晶子（2005）「スピーチ活動における評価とフィードバック効果」日本語教育方法研究会誌 Vol.12, No.2, 6-7
- 菅原和夫・高橋澄子（2008）『『ポスター発表』評価の一視点 ―質疑応答に基づく発表内容の評価―』日本語教育方法研究会誌 Vol.15, No.1, 52-53
- 田中真寿美（2008）「新聞の人物欄を用いた発表およびレジュメ作成の試み」日本語教育方法研究会誌 Vol.15, No.2, 20-21
- 茂住和世（2006）「学部留学生に対する口頭発表用レジュメの作成指導の実践」『大学での学習を支える日本語表現能力育成カリキュラムの開発：統合・協動的アプローチ』平成15～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究
- 日本語教育学会（2005）『新版 日本語教育事典』pp. 759、大修館書店